

待兼山俳句会

第七百二回

世話人

山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子

東中 亂・向井邦夫・森 茉衣

令和七年七月十四日（月）

会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・根来眞知子
東野太美子・東中 亂・向井邦夫・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・平井瑛三・森 茉衣

以上出席者十二名十投句者七名 計十九名

兼題

梅雨明・裸（幹三） 胡瓜・ナイター（暁子）

当季雜詠 通じて八句

次回

例会 令和七年八月十八日（第三月曜日）会場

大阪俱楽部会議室 締切 午後二時

兼題

文月・芭蕉（幹三） 線香花火（手花火）・新涼（暁子）

その他当季雜詠

次々回

令和七年九月二十二日（第四月曜日）

選者吟

梅雨明や新品の雲立ち上る

幹三

ぼつくりと胡瓜を折りてしづかな夜
神の目のままで裸で赤ん坊

ナイターや昼間の憂さを捨てに行く 暁子

大量の溜息天へナイター果つ

茄子胡瓜漬け良き妻の気分かな

幹三選

反返る勢溢るる裸の子
手に刺る胡瓜の棘の長さかな
裸子の四肢空掴み空を蹴り
梅雨らしき梅雨なくはやも梅雨開けぬ
隣家より胡瓜貰ひぬ朝暦
裸の子さんざめいてる川の中
梅雨明けて太陽いよよ居丈高
梅雨明や玻璃戸に寄りて爪を切る
黄なる花付けたるままの胡瓜もぐ
裸足の子少し野性味帶びて来し
エアコンのなきころ父の裸ぐせ
ナイターの光の堀端闇に浮く
◎大量の溜息天へナイター果つ
◎初生りの胡瓜一本分かち合ふ
梅雨明けて雲ぐんぐんと青空へ
興に入り裸の稚の逃げ回る
黴の香の句帳に初心覚えけり
育て來し取り立て胡瓜丸かじり

兵十郎	兵十郎	兵十郎	兵十郎
安廣	遊子	安廣	安廣
遊子	安廣	安廣	安廣
乱	安廣	安廣	安廣

ふるさとは遠くになりぬ藤の花
梅雨明けて山の少しく近くなり
茄子胡瓜漬け良き妻の気分かな
笛百合を手向けむ二上山の背に
◎梅雨明けて一雨欲しき日差しかな
ナイター やどよめく声の寄せて引き
梅雨晴間ブルーベリーに光の輪
古づけの胡瓜に生姜酒のあて
睡蓮の咲き揃ひたる茶席かな
貧しくもなく豊かでもなく胡瓜食む
◎頭まで砂にまみれて裸の子
半ドンの孫におにぎり梅雨あける
ナイター や勝利の熱狂深夜まで
◎地下を出て百日紅を眩しめり
花つきの胡瓜花まで酔のものに
ナイターの熱氣巻き上ぐ浜の風
仕事帰りナイターの灯を車窓より
母の手をするりと抜けて裸ん坊
山あひの小川に躍る裸子ら

遊子	安廣	安廣	安廣
安廣	安廣	安廣	安廣
安廣	安廣	安廣	安廣
安廣	安廣	安廣	安廣

幹三 特選句講評

・大量の溜息天へナイター果つ

暁子

俳諧味があります。最後の六文字も効果的。夏の夜の涼やかな天、解放感も感じます。夏の季語「ナイター」の本意はこういった所にあると思いますね。

輝子

・初生りの胡瓜一本分かち合ふ
自宅の庭で育った自然の恵みです。食卓で顔を見合わせながらお互いに味の感想を言い合っている、そんな景が浮かびました。とても大切にされている胡瓜です。

・梅雨明けて一雨欲しき日差しかな

堯子

眩くように詠まれた一句です。その自然体に好感が持てます。今年の呆気ない梅雨明けそして猛暑、俳句という詩型が上手く生かされ、共感を呼びます。

・頭まで砂にまみれて裸の子

兵十郎

俳句では、裸の子と来ればほぼ水に濡れています。しかしこの「裸の子」たちは砂まみれ。実に楽しそうです。きっと近くには海か冷たい川があるだろうという想像も働きます。

・地下を出て百日紅を眩しめり

太美子

句会場に向かう途中で詠まれた句に違いありません。私も淀屋橋駅のビルを出たところでこの百日紅を見て心が動きました。俳人の目が鮮やかにとらえた夏です。

暁子 選

・ナイターや昼間の憂さを捨てに行く
涼を感じました。大声を出す、知らない人達と心を合わす、ついでに冷えたビールを飲む。気持ちのもやもやや昼間の暑さを忘れさせてくれる場所なんですね。「や」で切つてあるところも涼味です。

・ナイターや果ての憂さを捨てに行く

暁子

◎初生りの胡瓜一本分かち合ふ
レスラーの古木の如き裸形かな
育て來し採りたて胡瓜丸かじり
裸祭もみ合ふ男ら湯氣立て
手に刺る胡瓜の棘の長さかな

◎初生りの胡瓜一本分かち合ふ

輝子

レスラーの古木の如き裸形かな
育て來し採りたて胡瓜丸かじり

安廣

裸祭もみ合ふ男ら湯氣立て

眞知子

手に刺る胡瓜の棘の長さかな

兵十郎

ナイターや勝利の熱狂深夜まで

堯子

◎スリッパ洗ふ今日よりは裸足と決めて
夕焼けしてたちまち染まる飛行機雲

翠遊子

龍穴てふ天然シャワー裸の子

兵十郎

暁子 特選句講評

我が裸体のびのび真夜の露天風呂

眞知子

光陰の暴威鏡の吾が裸

乱

神の目のままで裸で赤ん坊

幹三

ダンスパーティてふ紫陽花の朱色舞ふ

乱

梅雨明や新品の雲立ち上る

幹三

裸子の四肢空掘み空を蹴り

太美子

息つめつ延長ナイター見続けぬ

眞知子

貧しくもなく豊かでもなく胡瓜食む

瑛三

◎ナイターの光の堀闇に浮く

太美子

◎ナイターてふ光と声の堀闇かな

幹三

◎ガザの子の裸埃にまみれたり

堯子

盗み見る裸の背なの登り竜

輝子

梅雨晴間ブルーベリーに光の輪

兵十郎

裸かと見まがふギヤルの背にほくろ

恵子

梅雨明けてカツと雲間の峯あをし

盛雄

ナイターの興奮詰め込みて発車

太美子

睡蓮の咲き揃ひたる茶席かな

遊子

まだ息のある夏蝶に集ふもの

幹三

・初なりの胡瓜一本分かち合ふ

輝子

農家の情景ではなく、ささやかな家庭菜園の収穫の喜

びか。見つけたその場で二人で半分ずつ丸齧りされたのか

もしれない。「育て来し採りたて胡瓜丸かじり 安廣」も

同様の感動の場面であるが、「分かち合ふ」でこちらを選ん

だ。

・スリッパ洗ふ今日よりは裸足と決めて 翠

この破調は面白いが、一般的に言えば出来れば調子を整えたい。寒い間ソックスをはき、スリッパをはいていた。

梅雨も明け素足の方が心地よい季節になるともうスリッパは不要である。

・梅雨明や新品の雲立ち上る 幹三

梅雨明の青空に立ち上る真白な雲、まさに出来立ての真っ新という感じである。なお共に読みは「あがる」であるが、「上がる」は到達点に達することや状態の変化に注目する場合、「上る」は経過や過程経路に焦点があり、ある場所から別の場所へ移動する様子を表す。

・ナイターの光の堺垣に浮く

太美子

・ナイターてふ光と声の堺垣かな

幹三

共にナイターの中核である光の堺垣を取り上げられた。前者はこれもナイターの核である闇との対比、後者はこれも同様にナイターの核である声援と合わせられた。

瑛三選

梅雨入りを実感せぬ間に早明けし
裸かと見まがふギャルの背にほぐろ

ナイターや昼間の憂さを捨てに行く
恵子

心の憂さの捨てどころも変わってきた。
暁子

お大事に…。

・ガザの子の裸埃にまみれたり

堯子

昨日もパレスチナ自治区ガザの空爆の記事が出ていた。連日爆撃の報道に接し心が痛む。時事俳句は時代が移ると理解されなくなるので、時事問題は俳句の題材にふさわしくないといわれることもあるが、その場の一瞬の感動を切り取るのも俳句であるから、その時その時の心の動きを表現したい。

互選三句

朱美選

梅雨明けて太陽いよよ居丈高

太美子

究極の裸体よミロのビーナスは
裸かと見まがふギャルの背にほぐろ
近頃おばさんでも目のやり場に困るギャルに出会います。

眞知子

邦夫選

諸きゆうの味郷愁を誘ひけり

孫まぶしプロティンてふ裸胸

梅雨明や二枚のシーツ風にゆれ

梅雨明には存分な洗濯が！大きなシーツも直ぐ乾く。

遊子

恵子

和江

八十路女の特大胡瓜育てをり
茄子胡瓜漬け良き妻の気分かな
ナイターや昼間の憂さを捨てに行く
阪神負け倍増の憂さを如何せむ。

かな子選

五右衛門風呂裸の父と遠き日よ
母の手をするりと抜けて裸ん坊

ぽつくりと胡瓜を折りてしづかな夜
五右衛門風呂裸の父と遠き日よ
母の手をするりと抜けて裸ん坊
遠い日の感触が戻ってきます。

和江選

幹三

眞知子

翠

安廣

暁子

和江

恵子選

ナイターの終はり駅長超多忙

邦夫
堯子

関取の若き裸の張りと艶

かな子

汗裸ひよいと湯船の父の手に
ある日のお風呂場、父と子供の幸せな声が聞こえるよう。

堯子選

地の喘ぎにほひ立たせて夕立過ぐ

太美子

梅雨明けてカツと雲間の峯あおし

盛雄

ナイター やどよめく声の寄せて引き

安廣

球場に響く観客の声援はまさに波の満ち引きのようです。

太美子選

大量の溜息天へナイター果つ

暁子

貧しくもなく豊かでもなく胡瓜食む

瑛三

神の目のままで裸で赤ん坊

幹三

上五、中七の畳みかけが効果的で、素晴らしいお句。

輝子選

大量の溜息天へナイター果つ

暁子

裸子の四肢空掴み空を蹴り

太美子
邦夫

弛みたる裸ぞいのち淋しかる

邦夫
堯子

誰しも思う事だが、いのち淋し、の言葉に惹かれた。

兵十郎選

レスラーの古木の如き裸形かな
裸子の四肢空掴み空を蹴り

安廣
太美子

神の目のままで裸で赤ん坊

幹三

まさに赤ん坊は神の目を持つて、裸で生まれてきた。

森茉衣選

花つきの胡瓜花まで酔のものに
頭まで砂にまみれて裸の子

輝子
兵十郎

島昏れて天の闇裂く大花火

輝子
盛雄

単なる明暗を超えた漆黒と燐爛の対照の美しさに圧倒。

眞知子選

ナイターの興奮詰め込みて発車

太美子

つくづく老いたり鏡に我が裸身

輝子

地の喘ぎにほひ立たせて夕立過ぐ

太美子

さつと夕立が降った後の匂いを言い当てて妙。

翠選

ナイターの光の坩堝闇に浮く

太美子

スーパーの胡瓜真つ直ぐ濃き緑

邦夫

また負けか音消すナイター落ちつかず

眞知子

その気持ち分かる。でも一縷の希望も捨てきれず。

盛雄選

地の喘ぎにほひ立たせて夕立過ぐ

太美子
堯子

関取の若き裸の張りと艶

太美子
堯子

ナイターの光の垣塀闇に浮く
光と闇の対比が絶妙でナイターの光景がよく出でている。

朱美
瑛三

安廣選

ビル出でて顔より火照り初む炎暑

太美子
堯子

地の喘ぎにほひ立たせて夕立過ぐ

太美子
堯子

裸子の四肢空掴み空を蹴り

太美子
堯子

裸の子の元気さ、愛らしさを余す所なく表現された。

遊子選

大量の溜息天へナイター果つ

太美子
堯子

ガザの子の裸埃にまみれたり

太美子
堯子

初生りの胡瓜一本分かち合ふ

太美子
堯子

家庭菜園初の収穫の喜びを分かち合う一句。

太美子
堯子

乱選

梅雨明けを知らずメダカの死す朝

和江
堯子

茄子胡瓜漬け良き妻の気分かな

太美子
堯子

裸子の四肢空掴み空を蹴り

太美子
堀子

「空」を繰返し、四肢（二本ずつの手足）が掴み蹴る。

参加者自選句

貴重品友の庭から來た胡瓜

朱美
瑛三

外人と裸の付合出で湯かな

和江
かな子

孫まぶしプロティンてふ裸胸

邦夫
堀子

ナイターの帰りらし父と子の会話

恵子
堀子

裸子ら遠浅の海満喫す

堀子
堀子

梅雨明やブルーインパルス湧く親子

太美子
堀子

梅雨明けて一雨欲しき日差しかな

堀子
堀子

裸子の四肢空掴み空を蹴り

太美子
堀子

盗み見る裸の背なの登り竜

輝子
兵十郎

頭まで砂にまみれて裸の子

茉衣
兵十郎

エアコンのなきころ父の裸ぐせ

眞知子
翠

裸祭もみ合ふ男ら湯氣たてて

安廣
翠

裸足の子少し野性味帶びて來し

盛雄
翠

島昏れて天の闇裂く大花火

太美子
翠

ナイターのどよめく声の寄せて引き

遊子
翠

夕焼けしてたちまち染まる飛行機雲

遊子
翠

光陰の暴威鏡の吾が裸

乱
遊子

即吟

卓上に笹百合が一本、飾られました。

まだ開き切らぬ淡いピンクの花です。

時間を惜しんで作句、各自二句選びました。

作者名の下は得点

笹百合の加はりたげに句座眺む

暁子 1

笹百合二つ夫婦のごとく他所見たり

邦夫 1

笹百合やピンク濃淡壺に合ひ

恵子 1

笹百合やうつ向き咲けど強さ秘め

堯子 1

笹百合の野の風情もち句座にあり

太美子 6

笹百合や幼き恋の日の遠く

輝子 1

笹百合や木の間隠れに背を伸し

兵十郎 3

ささ百合や登美子のひと世ふと思ふ

眞知子 2

風に百合ゆれて匂ふや昼の丘

幹三 2

笹百合や求めし山の友遙か

翠 安廣 2

もの想ふ乙女か卓の笹百合や

乱 2

笹百合の降臨ありと詠みし人

ひとり

山田安廣

前回の会報は皆様方の自主点検による校正を試験的に実施させて頂きましたが、ご協力のお陰様で大過なく実施できました。改めて有難うございました。今後、この方式を実施させて頂きたいと存じます。

例会では幹三さんから「季語の持つニュアンスを大切にする」と言うお話がありました。例えばナイターの場合、「夜」感じさせる内容や、裸と言えば「暑さを避ける」というニュアンスなどが感じられる使い方が必要で、ゲームにでも合う内容や風呂に入っている裸では、季語の持つニュアンスとは異なる事になる、というものでした。

その他、中八は極力避ける事。一度自分の句を口ずさんでみて、リズムに違和感がないか確認して欲しい、とのヒントを頂きました（中八の事は再三ご注意を受けています）。